

芹沢文学読書会

案内通信

No. 148

2021年2月23日(火)

(令和3年)

2月便り

— 温かく 風も爽やか… 里の浜 松林庵主人 —

2月になって、また大雪が降りましたが、日々に温かくなり、既に初夏の爽やかさです。良い季節となりましたが、お元気にお過ごしのことと思います。

1月10日の第147回の芹沢文学読書会は、国東半島の大雪で中止になってしまい、申し訳なく思います。日本の新型コロナウイルスの流行は、2回目の緊急事態宣言が出されて、少しずつ感染者が少なくなっていますが、まだまだ安心出来ません。特に7・8月の東京五輪のためには、何としても第4派の感染の波を押さえなければなりません。たとえ外国からの入国を止めて、国内に住む日本人と外国人だけの観客としても、立派に東京五輪・パラリンピックを開催したいものです。ワクチンの接種も始められました。新型コロナウイルスの終息が、日本だけでなく、全世界で達成されますことを念願しています……。

3月14日は、大雪の心配も無いと思います。マスクをつけ、感染対策をして芹沢文学読書会を開きたいと思います。令和3(2021)年も芹沢文学を読み語りたいものです。

都合をつけて御参加下さい。最近、御無沙汰の方も、気楽に御参加下さい。

第148回・芹沢文学読書会

①日時： 3月14日(日) 午前10時～12時 [*原則的には奇数月の第2日曜日午前]

②会場： 大分県立図書館 研修室 No.5 [*会場/通常は研修室No.5です]

③内容： [I] 芹沢文学に関する話題や情報 10:00～10:15 am 自由に話す。

[II] 芹沢文学読書会 10:15～12:00 am 司会担当 小串 信正

○テキスト 随筆①「三人の天皇を送った」 随筆②「『大自然の唯一の神』に支えられ」

①随筆は、昭和天皇が1月7日に崩御され、明治天皇、大正天皇のことを回想。

②随筆は、フランス留学中に結核に倒れ共に闘病したジャックなど三人のことを回想。

初出/①は平成元年3月25日の中日新聞に発表された随筆です。②は平成元年10月

9日の朝日新聞に発表された随筆。連作『人間の意志』を創作している93歳の作。

再録/『芹沢光治良文学館12』(平成9年8月10日 新潮社発行)に収録。536～541頁。

＝次回は、令和3(2021)年5月9日(日)午前の予定です。＝

◎同封資料；①随筆「夏の日」芹沢光治良 雑誌<文藝>第七巻 第九号 昭和14(1939)年9月1日 改造社発行。19頁 拡大(×1.15) *結核の療養を終えた頃の肖像写真と近況報告の随筆が収録されています。机に哲学者アランの胸像があり、パリ留学中にアラン先生にお会いしたことが回想されています。昭和13年4月から7月に中国の戦地を取材して、長編小説『愛と死の書』を書き始め、この14年7月11日に小山書店から出版した後の8月に書いた随筆と思われる。〔資料提供 中村輝子〕

芹沢文学・大分友の会



連絡先： 〒872-1651 大分県国東市国東町浜 4765(番地) 小串信正

☎ FAX 0978(77)0565 郵便振替口座 01970-5-16072/芹沢文学・大分友の会

☆ 第147回・芹沢文学読書会は大雪のために中止となりました。 ♪♪♪

第147回の芹沢文学読書会が、1月10日(日)に大分県立図書館の研修室No.5で行われる予定でしたが、国東半島(国東市)の大雪で、中止となってしまいました。金さんと呉さんも参加する予定でしたが電話し、その他常連の参加者にも電話連絡をしました。

『父、芹沢光治良、その愛』

今回の芹沢文学読書会では、テキストは『芹沢光治良文学館12』の随筆「三人の天皇を送った」と『『大自然の唯一の神』に支えられ』を読み語ることにします。今回の読書会へは都合をつけて御参加下さい。マスクやアルコール消毒で、コロナウイルス対策をして行います。どうぞ、奮って御参加下さい。

○未納の方、令和2(2020)年度の年会費の納入をお願いします。

令和2年度の年会費が未納の方は納入をお願いいたします。篤志者の寄付により今年度の年会費も1200円に止めていますので、納入をお願いいたします。同封の郵便振替の払込取扱票にて納入して下さい。寄付も受入れますが、無理をされないように。☺ ➔ ☆ ☆

*どうしても退会されます方は、ハガキ等にて御一報下さい。

◇朝日新聞に『父、芹沢光治良、その愛』(野沢朝子著)の広告

朝日新聞の令和3(2021)年2月8日の1面下の図書の広告に、野沢朝子著の『父、芹沢光治良、その愛』(明窓出版発行)が紹介されました。まだ未読の方は、この機会に購入し、読むことをお勧めします。

【芹沢文学案内 No. 95】 芹沢光治良と名古屋 ♡◇♣♠

朝日新聞 2021年2月8日

芹沢文学の主要な舞台は、生育の地沼津(我入道)、勉学や創作の地東京(中軽井沢)、留学闘病の地パリ(スイス)がありますが、もう一つは名古屋です。名古屋には、妻金江の実家である藍川家がありました。金江の父は、東大を卒業し弁護士となり、愛知電鉄(後の名古屋鉄道)社長の藍川清成で母はしむです。芹沢光治良は、ペール石丸助三郎の勧めで、藍川金江と大正14年4月に結婚し、一緒にパリに留学をします。結核闘病の後に昭和3年11月に帰国して、名古屋の藍川邸に正月まで滞在します。名古屋で弁護士をするように勧められますが、単身上京します。藍川氏は東京滞在のための豪邸を東中野に建てて、芹沢夫妻を住ませます。芹沢光治良は昭和5年4月に改造社の懸賞小説に『ブルジョア』が一等に当選しました。東京朝日新聞の夕刊に長編小説『明日を逐うて』を連載し、中央大学の講師を辞めて、作家としての道に進みます。妻の実家との交流もあり、名古屋も舞台にします。岳父藍川清成は熱血漢であり横暴な異色的人格で、「大鷲」や「ボストンバッグ」、『愛と死の書』等の多くの長編小説や大河小説『人間の運命』にも登場します。その妻しむも「鎮魂歌」等に創作されます。名古屋は、芹沢文学を広く深める舞台となったのです。

それで、名古屋や東海地方には多くの読者があり、「芹沢文学愛読者の会(安井正二夫妻)」や「読書会二三の会(山口たか子氏)」、「『人間の運命』を読む集い(近藤英子氏)」等があります。